

論文の内容の要旨

論文題目 奈良時代の造営体制と建築

氏 名 海野 聡

奈良時代には中国から律令制度が導入され、多くの建物が新たに造営された。中央では東大寺や西大寺などの諸大寺や平城宮が造営され、地方では大宰府、国衙、郡衙、駅家などの律令制度を支える地方官衙や国分寺など多くの施設が設置された。

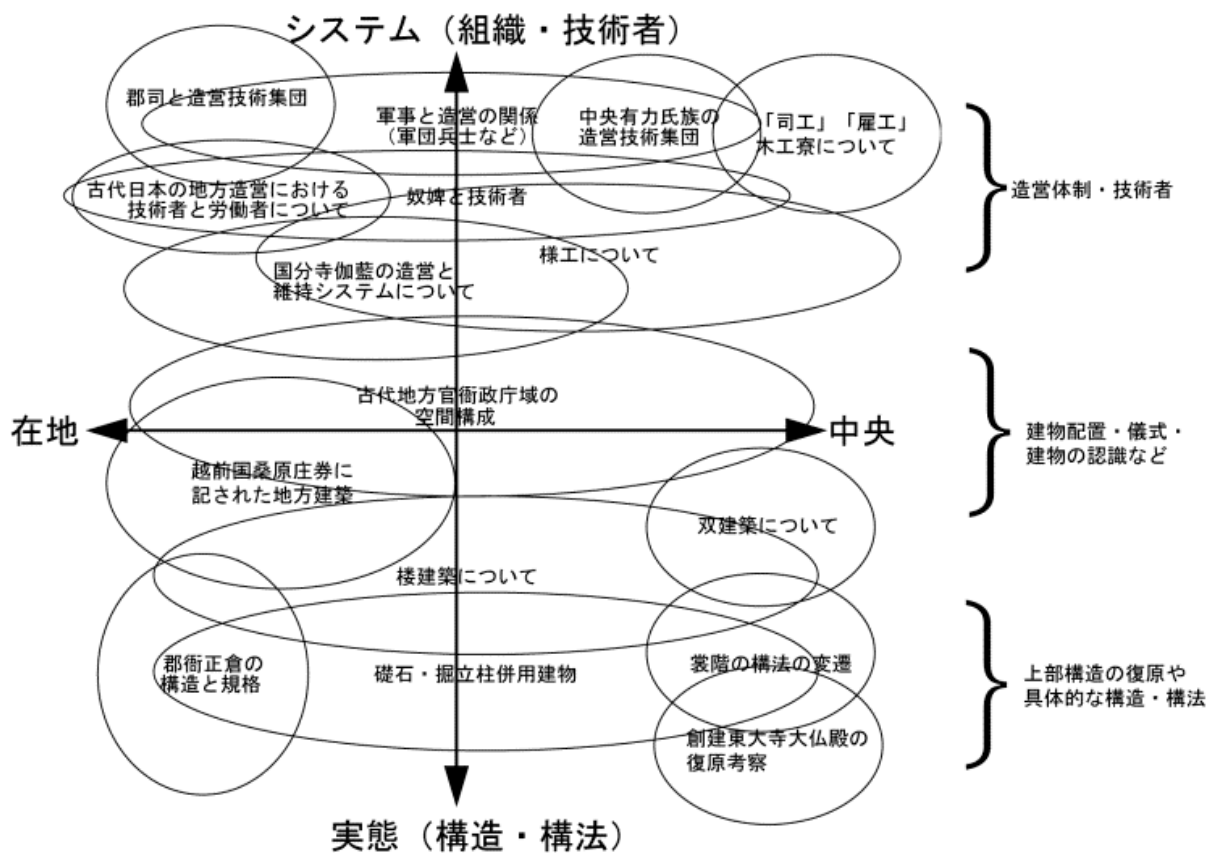
古代建築史、特に奈良時代の建築史の研究では、大きく分けて1. 造営組織の構成に関するもの、2. 寺院の平面プランの復原や現存遺構の検討、3. 発掘遺構をもとにした復原の3つを大きな軸としてきた。これらの先行研究は膨大であり、成果や功績は述べるまでもないが、その対象は主に中央であり、地方には十分に目が向けられてこなかった。

たしかに地方には奈良時代以前の現存遺構は存在しないが、発掘遺構は数多く検出されている。これらの発掘遺構に対して、考古学的アプローチは試みられているが、上部構造の詳細な検討には至っているものはごくわずかで、建築学からの研究が求められている。

このように奈良時代の建築史の先行研究は、平城京を中心とした中央の諸大寺や都市・都城を対象としており、地方に関する考察は不足している。その結果、単純に国分寺や地方官衙などの建物にも中央と同様に尺による規格が存在し、在地の技術とは中央の技術が伝わったものであると捉えていた。しかし実際の地方の発掘遺構は中央とは大きく異なり、柱筋が通らないものや柱間が等間ではない遺構が多数存在する。これらの発掘遺構は在地に中央とは全く異なる独自の技術が存在したことを示唆している。

それにもかかわらず、地方の造営を単純に中央の技術の伝播による造営と考えて発掘調査をしている結果、現在、地方の独自の技術の痕跡を見逃し、得られるはずの建築情報が永遠に失われる危機にさらされているのである。そのため地方の造営技術について建築史学の立場からアプローチし、奈良時代の造営の全体像を提示することは、これを防止する一助となろう。よ

研究対象には2つの軸を設定した。1つは中央と在地の軸、もう1つはシステムと実態という軸である。前者の軸によって、先行研究のような中央主眼ではなく、地方の遺構に目を向け、後者の軸では技術者や労働力、維持管理の方法など、造営を取り巻く枠組みについてのシステムの検討と具体的な建築技術に関する検討の2つの面からアプローチした。



本論文は、研究背景・問題意識を述べた序章、奈良時代における造営組織・技術者・労働者を扱った第Ⅰ部（第1章～第5章）、建築技術・構造・空間・認識を扱った第Ⅱ部（第6章～第12章）、本論文のまとめにあたる結語からなる。第Ⅰ部・第Ⅱ部で、内容は多岐にわたるが、全章を通して中央のみではなく、地方の状況を明らかにするという目的は同じであり、問題意識は共通である。以下、その概要を記す。

第1章では令外官司である造東大寺司において造営に従事した「司工」について考察し、その中でも長上工・司工の能力と木工寮の位置づけを明確にした。そして司工の能力が個々人で異なる点に着目し、現場が上部機関である造東大寺司に対して能力の高い技術者を名指しで要請していたという事実を通して、造東大寺司の技術者の差配と木工寮による技術者及び技術の管理を解明した。

第2章では、奈良時代に存在した、官以外の技術者集団である様工を対象に、様工の造営作業における能力や請負契約における主体性について言及し、律令制下における官以外の技術者集団の存在とその実態を明らかにした。

第3章では、地方の造営現場における技術者と労働者の実態を解明するため、専門技術者ではない百姓の造営体制と地方における技術者、特に国府と郡家の技術者の技術力の差を推察した。また律令制下における力役と兵役の分化に着目し、軍団兵士による造営従事の実態を明らかにした。これらの百姓・軍団兵士以外に造営に従事したものとして技術を有した奴婢（以下、技術奴婢とする）が存在したことが明らかとなっているが、この技術奴婢の「家」による保有を通して、奈良時代における造営技術の保持形態の一端を推察した。

第4章では、律令制度のもとで、臨時の官司として陵墓の造営のために置かれた造山司、山作司、作山稜司に複数回、従事した官人について検討した。その官人の多くは、7世紀に宮城門を造営し、各々門を守衛していた門号氏族であった。7世紀には門号氏族は造営能力を有していたが、なかでも佐伯氏や多治比氏は、8世紀に入っても造営の場において引き続き活躍していた。これらのことを通して、造営技術集団の保持に基づいた氏族による技術の保有、さらには郡司や在地豪族による造営や維持管理の様子から、郡司や在地豪族による氏族としての造営技術の保有と造営技術集団の保持を解明した。

第5章では、国分寺伽藍の造営過程と維持管理について検討した。そして国分寺伽藍造営の意思表示を天平12年（740）の七重塔の建設の意思表示と捉え、そして国分寺伽藍の造営を3つの段階計画段階（国分寺の経営計画及び建設計画、造営のための経済的枠組み作成）、実務段階（国師と在地の協力、実務の遅滞と催促）、完成以降（完成時期、完成後の維持管理）に分類し、その過程において、儀式に必要な機能を知る国師の果たした役割を明らかにした。

第Ⅱ部について

第6章では、奈良時代に存在した楼閣について、これまで登ることはないと言われてきたが、実際には上層を利用していたことを示した。また奈良時代の「楼」という建物の形状を検討し、床が張られていたことや、儀式を通して、楼の意匠的機能を明らかにした。

第7章では裳階を取り上げ、裳階の取り付けに関する技術（構法）を整理し、この構法を分類し、時代と関連付けて、裳階の形式とその比較を行った。

第8章では、奈良時代に存在し、その後の仏堂の平面形式の発達に大きな影響を与えた双堂について検討した。双堂については井上充夫氏の論考があるが、これに対して十分な批判や評価が与えられているとは言い難かったため、同じく「双」の字を用いた双軒廊や双倉の事例を参照しつつ、奈良時代に認識されていた双建築の形態を明らかにし、現在、用いられている学術用語の双堂と当時の双堂の違いに言及し、双建築の定義と新たな学術用語の設定を提唱した。

第9章では、国庁や郡庁といった地方官衙の政庁域を対象に、地方官衙の前庭空間における儀式、前庭空間の広さと国の等級の関連性に言及した。特に地方官衙は律令制度に伴って、中国から導入した全く新しい施設による空間構成であるのか、律令制度以前から存在する形式を受け継いでいるのか、という空間構成の系譜を検討し、律令時代以前から存在する天皇と臣下による空間構成であることを解明した。

第10章では、東大寺庄園である越前国桑原庄の収支決算報告書「桑原庄券」を解読し、地方建築の上部構造を推定した。身舎と庇の作業分担の可能性や「桑原庄券」における単功と平面規模の関係、価格と平面規模、屋根の形状、葺材、板壁、板敷の関係を検討し、葺材や板敷などの要素は価格に大きな影響を与えず、平面規模が価格に直結する要素であることを明らかにした。

た。

第 11 章では、現存遺構の倉庫建築を対象に平面規模の規格の有無を検討し、各柱間ではなく、総間による規格であることを示した。この成果をもとに郡衙正倉と目されている上神主・茂原遺跡の発掘遺構を分析・検証した結果し、実際に柱間には規格はみられないことを確認した。

第 12 章では、礎石と掘立柱を併用した発掘遺構を対象に、礎石の柱と掘立柱の構造主体に着目し、上部構造を含めた特徴及び機能を検討した。また床張りの建物との関係も大きく、倉庫や楼閣といった建築形式の一端が窺われた。

結語では、本論文の成果として、技術者集団の形成による技術保有という実態、中央と地方の技術差、技術の継承といった奈良時代の造営体制の実態を新たに提示した。また建築の形から奈良時代における特徴的な建築形式・中央と地方間における政庁空間の模倣・裳階や倉庫の建築技術といった建築の形と意味を示した。これらを踏まえ、造営体制と建築技術の 2 軸の研究概念をもとに、本研究の手法による展開の可能性、すなわち時間軸における奈良時代の前後時代との関係、地域軸における東アジアとの関係でそれぞれ発展性を提示した。こうした点から、本論文は、日本における奈良時代の造営体制と建築技術を解明したのみではなく、古代の東アジアの建築技術、造営体制を紐解くための出発点を示したといえよう。